

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

私のイタリア留学記： ボローニャ、ミラノ

* イタリアの専門学校で服を学ぶ *

上山 恵加

皆さん初めまして。この体験記を機会に是非皆さんにもイタリアを身近に感じて頂きたい、今回は私の4年間に渡るイタリア生活について書いていきたいと思えます。

私がイタリアに行こうと決めたのは、高校のファッションデザイン科に通い始めたのがきっかけでした。服について勉強していくうちに本場フランスやイタリアで学んでみたいと思うようになり、かねてから海外生活に憧れを抱いていたこともあり、思い切って行ってみようと思を決めました。

パリもミラノもファッションに関しては長い歴史を誇る都市で、どちらも毎年コレクションが開かれており、勉強するには最適な場所です。そこで当初はどちらに行くべきか決めあぐねていたのですが、結局イタリアを選んだのは、実に簡単な理由からでした。言語です。初めてフランス語を聞いた時、正直こんな難しい発音は自分には到底無理だと感じました。一方、ローマ字読みをすればそのまま伝わるイタリア語ならなんとかやれそうな気がしたのです。そこで、学校のない毎週土曜日にイタリア会館の語学講座に通い、また資料室でみつけたパンフレットから《マランゴーニ服飾学園》に通う決意を固めました。

しかし高校に通い、学校の課題をこなしつつイタリア語を習得するというのはやはり無理でした。このまま留学してもイタリア語で行われる授業にはついていけないだろうと思われたので、計画を変更し、まずは語学学校に一年間通うことにしました。場所も《マランゴーニ》のあるミラノではなく、

少し小さめの街からイタリアに慣れる方がいいというマリアローザ先生の助言もあって、ボローニャ Cultura Italiana 校にしました。



【夜のボローニャの喧騒】

さてボローニャに着いて、言葉にも言い表せないほどの緊張の中、テストを受けて振り分けられたのは、自分の能力をはるかに上回るクラスで、日本人は私だけでした。しかも文法の説明は他の外国人に合わせて英語でされ、英語があまりできない私だけが 1 人取り残されていき、落ちこ

ぼれに……。友達も家族もない、言葉も分からない環境に耐えられず、来て早々にホームシックにかかって毎日泣いていたところ、幸運にも同じアパートに住んでいた日本人から、クラスのレベルを落とせることを教えてもらいました。翌日、早速先生に覚えてたの拙いイタリア語で事情を説明すると、簡単に新しいクラスに替えてくれました。

その新しいクラスにはこんなにも日本人がいたのかとビックリするくらい、ほとんど日本人ばかりでした。が、おかげで安心して授業が受けられ、分からないところは助け合い、何とかやっていけるようになりました。ルームメートのギリシャ人の子とも仲良くなり、毎日唯一の共通語であるイタリア語を必死に使って会話をしているうちに、3ヶ月くらいで自分が何とか喋れていると実感できるようになり、半年後には日常の会話くらいは問題なくこなせるようになりました。



【クリスマス・イルミネーション1】

そうなるとイタリア人の友達もできはじめ、テレビを見たり別の町まで出かけたりと、色々楽しめるようになりました。また私の場合、一年という長い期間にわたって語学学校に通ったおかげで、ゆっくりと時間をかけて現地の生活に溶け込んでいったように思います。

とても印象的だったのは、気候が暖かくなってく

るとレストランが外にテーブルをセットし、あるところでは簡易ステージで生演奏を楽しみながら食事ができることでした。日本では中々味わえないディナーのとり方です。もう一つ感動したのは、クリスマスが近づくと道路やお店など町全体がイルミネーションで飾られ、ボローニャでは有名な Due Torri までもが綺麗に光り、チェントロの大きな広場にはツリーが立てられて、かなり早いうちから町全体がクリスマス一色になることでした。ライトアップされた夜に出かけて綺麗に輝く町を歩くだけでも、日本とは違ったイタリアのクリスマスを楽しむことができました。



【クリスマス・イルミネーション2】

その後一年間のボローニャ生活を終え、ようやく本来の目的地であるミラノへと引っ越すことになりました。ミラノに引越しをして思ったことは、やはりミラノは大都市だということです。どこへ移動するにも地下鉄で、どこに何があるのか町を把握するまでしばらく時間がかかりました。その点、ボローニャは小さな町だったので、徒歩で町を見て回ることができ、人の数もミラノよりも少なく、早く馴染むことができました。それでいて他の町に旅行するにはローマやミラノまで2時間、フィレンツェまでは1時間と、交通の面でもとても便利でした。

一方ミラノには有名なブランド店が立ち並び、

H&M や Zara など日本で有名になりつつある海外のショップも数多くあり、さすがファッションの中心地だと改めて感じたものです。

ミラノでは最初 1 ヶ月間ファッション用語を学ぶため Lingua Due という別の語学学校に通い、イタリアの服飾文化と専門用語を学びました。



【マランゴーニでの授業風景】

私の選んだ服飾学校《マランゴーニ》は、Dolce & Gabbana や Moschino など数多くの有名デザイナーを生んだ学校でもあり、それだけに厳しいところでした。しっかりとイタリア語を理解し、一定の成績を取らなければ卒業できないような学校です。開始は9月。ファッションデザイン・コースはもちろん、パターンメイキング・コースやインテリアデザイン・コース、アクセサリー・コースなど専門が細かく分かれています。

私はファッションデザイン・コースに通いながら、パターンの基礎とグラフィックデザイン、そしてファッションデザインの3科目を学びました。1年間のコースを修了した後、マスター・コースという最終コースにも通うことにしたのですが、このマスター・コースでは、学ぶ学科がイタリア服飾文化、マーケティングとさらに二つ増え、基本のファッションデザインに関しては、色々な有名企業が学校を訪れて自分たちの作品のプレゼンをしていく授業スタイルでした。先生から理不尽な言葉をぶつけ

られたことや、企画を考える期間が2週間しかもらず全く眠れない日々が続いたり、本当に辛くてしんどいこともありましたが、今考えると信じられないようなチャンスと経験を与えられたわけで、この学校に通ってよかったと思います。《マランゴーニ》と巡り合わせてもらったことに心から感謝しています。

企業に作品を気に入ってもらえると、それが商品化されたり、その企業に入って仕事ができたりと、さらにいい経験をさせてもらえる場合もあります。さらに、マスター・コースに通うと、その後1年間インターンシップを利用してイタリアで仕事をするチャンスが与えられます。私も、マスター・コースで提案した資料を基に学校側が企業にアプローチしてくれて、1年間向こうの会社で仕事をする機会をもらいました。インターンという身なのでお給料というほどのものはもらえませんが、学校の延長だと考えると本当にいい経験でした。

日本とはまた違った文化やコミュニケーションの方法など、イタリアの様々な部分を見ることができ、日本には分からなかったことをたくさん学ぶことができました。そして、たくさんの人たちとの出会い、自分が大きく成長できたことをとても嬉しく思います。思い切って留学して本当によかった。幸い日本でデザイナーの職につくことができ、今は忙しい毎日を送っていますが、機会があれば是非またイタリアに行き、まだまだ知らない部分を見たいと思います。

ここに書き綴ったのは4年間の生活のごく一部ですが、少しでも皆さんに留学や学校、イタリアについて興味を持っていただけたら幸いです。

最後まで読んで頂きありがとうございました。

(語学講座受講生)

パドヴァ通信

第10回『マルタ島へ』

“*Ordine di San Giovanni e Caravaggio*”

深草 真由子

ローマから飛行機で一時間半。地中海に浮かぶ島、マルタ共和国へやって来た。空港で私を出迎えてくれたのは強烈な太陽。シチリアのさらに南に位置するだけあって、さすがに日差しが強い。まだ五月に入ったばかりだが、もう太陽がキラキラしている。空港前のターミナルで小さなバスに乗り、首都ヴァレッタへ向かう。舗装の行き届いていないアスファルトの道と荒っぽい運転、石でできたクリーム色の家々、ひっそりと静まりかえった町、ごつごつとした岩の中を進む途中でふと遠くに姿を見せる地中海・・・マルタの景色にはどこかシチリアの田舎を連想させるものがある。シチリアをバスで東から西へと横断した時のことを思い出した。なんということのない平凡な風景が新鮮に映った頃の自分を懐かしみながら。



【聖ヨハネ騎士団の要塞、聖エルモ岩】

この国の公用語はマルタ語と英語である。イタリア語とアラビア語の影響を強く受けているマルタ語が現地の人同士が日常使っている言語だ。彼らの会話を聞いていると、時々イタリア語によく似た単語が聞こえてくる。たとえば「こんにちは」は Bongu (ボンジュ)、「ありがとう」は Grazzi (グラツィ)となる。1800年から1964年まで英国領であったために英語も公用語だが、これは学校で学ぶ言語のようだ。そしてイタリア語も問題なく通じ

る。やはりイタリア人の話す本物のイタリア語とは若干イントネーションは異なるが、もう母国語のようなものだ。マルタのテレビでは Rai やメディアセットなど、イタリアの番組が常時放映されているし、イタリアからの観光客も多い。舌の肥えたイタリア人が満足するかどうかは定かではないが、街中ではピッツェリアやイタリア料理のレストラン、イタリア風のバーやシチリア名物のアランチーニを売っている屋台をよく目にする。マルタ島のスナック Pastizzi はナポリのお菓子スフォツリヤテツラと形がそっくりだ。ここが地中海の真ん中にぽつんと浮かんだ小さな島国であることを、一瞬忘れてしまいそうになる。

マリンスポーツとは縁のない私にとって、マルタ観光のハイライトはヴァレッタの St John's Co-Cathedral (聖ヨハネ教会堂)だ。今ではお土産屋さんの連なるヴァレッタの町は、十二世紀はじめに創設された聖ヨハネ騎士団が拠点とした城塞都市である。1187年にエルサレムがイスラム教徒の手に渡って以降、エーゲ海南東部にあるロードス島やマルタ島が、オスマントルコに対抗するキリスト教勢力の最前線となった。ここに集まった騎士たちはヨーロッパの名のある家柄の貴族で、オスマントルコの攻撃からカトリック信仰とヨーロッパを守るという使命を帯びていた。1529年に神聖ローマ皇帝カール五世によってマルタ島に配置された聖ヨハネ騎士団は、1565年のオスマントルコ軍による大包围に耐え、1571年レパントの海戦におけるキリスト教側の勝利に大きな貢献をなした。ヴァレッタの教会堂は海戦後の1577年に完成し、騎士団の守護聖人である洗礼者ヨハネに捧げられた。そして1798年ナポレオンによってマルタが政略されるまでの約200年間、この教会堂は騎士団の心の拠り所であり続け、騎士たちの巨額な寄付のおかげで、その時代の最もレベルの高い芸術作品で飾られた、大変美しく豪華な教会となった。

入口を通過してすぐ目に留まるのは、死神の描かれた碑板だ。教会の床の一部が墓石になっていることは多いが、この聖ヨハネ教会堂ほどに美しい墓碑はなかなか見つからないのではないだろうか。床の大部分が大理石でできた墓碑であり、そこに眠る騎士たちの功績や宗教心についての記録が記されている。マルタ十字の模様で飾られ

た壁も印象的だ。騎士団の中で騎士たちが言語ごとに、すなわち出身地ごとのグループに分けられていたように、教会の礼拝堂も八つの言語に分けられている(イタリア語、ドイツ語、フランス語、プロヴァンス語、アラゴン語、オーヴェルニュ語、アングロ・バイエルン語、カステリヤ・レオン・ポルトガル語)。聖ヨハネ騎士団が西ヨーロッパのさまざまな土地から一つの使命のもとに結束した騎士たちの集団であったことを確認させられる。



【坂の多いヴァレッタの街】

ハイライト中のハイライトは、聖ヨハネ教会堂に残されたカラヴァッジョの二つの作品、『聖ヒエロニムス』と『洗礼者ヨハネの打ち首』だ。実は私はカラヴァッジョを見るためにわざわざマルタにやって来たと言っても過言ではない。画家カラヴァッジョは1573年にロンバルディア州で生まれ、十六世紀後半のマニエリズム伝統の改革者、十七世紀の絵画の主流となるバロック様式の創始者であり、「光と影の画家」とも形容される。カラヴァッジョの生涯は短いが波乱万丈だった。ローマ滞在中に殺人を犯したということで有罪判決を受けて逃亡、ナポリを経てマルタに到着したのが1607年のこと。この島で上述の二つの作品と、現在はルーブル美術館に所蔵されている『マルタ騎士団団長 Olaf di Vignacourt の肖像』を作成したが、ある騎士との不和に端を発した問題で監獄入りとなった後、1608年10月に脱獄してシチリアのシラクサに上陸を果たす。ローマ、ナポリ、マルタ、シチリアを放浪しながらその土地その土地で印象に残る傑作を残している。私が初めてカラヴァッジョの作品を見たのは、愛知県の岡崎市でカラヴァッジョ展が開催されていた時のことだった。かなり多くの作品が一堂に公開されていたと記憶している。同

時期にイタリア会館でもカラヴァッジョや彼の影響を受けた画家たちについての講演会が行われ、カラヴァッジョのドラマチックな人生や絵画の中に隠された謎についての話を聞き、大いに興味をかきたてられた。しかし本当に感動したのは、ローマでカラヴァッジョを見た時のことだった。サン・ルイーゼ・デイ・フランチェージ教会の礼拝堂の『聖マタイと天使』、『聖マタイの召し出し』と『聖マタイの殉教』、サンタ・マリア・デル・ポポロ教会の『聖パウロの改宗』と『聖ペテロの磔刑』。礼拝堂内の照明は寄付制で、機械にコインを投入し、金額に応じた時間だけ明かりが灯されるようになっている。照明が当たっている間はカラヴァッジョの絵の色彩がとても鮮やかで、黒い背景に人物が浮かび上がっているかのように見える。そして照明が消えると、途端に全てが消えてしまい、額縁の中には漆黒の闇しか残らない。これほどまで光がスポットライトのような役目を帯びるのも、カラヴァッジョの絵に対してでしかないとは思っている。ローマでは小銭を持ってこれらの教会に足を運んでみてほしい。



【洗礼者ヨハネの打ち首】

マルタのヴァレッタに残るカラヴァッジョは、聖ヨハネ教会堂の奥にある美術館に所蔵されていた。『聖ヒエロニムス』はもともとイタリア語の礼拝堂の中に飾られていたものである。聖人なのだが聖人には見えない、上半身を露わに、ペンを握ったものを書いている老人と真紅のストールが漆黒の背景の上に浮かび上がっている。大迫力の『洗礼者ヨハネの打ち首』の方はカラヴァッジョの作品の中でも最も大きなもので、画家による直筆サインが残されている唯一の作品だということだ。よく見てみると確かに洗礼者ヨハネの首元から噴き出した血の脇に、暗い赤色で Michelangelo と書い

である(カラヴァッジョの本名は Michelangelo Merisi であるが、通常は画家の生地の名前「カラヴァッジョ」で呼ばれている)。まるでヨハネの血を指でなぞってサインをしたような感じがするのが不気味でもあり、ドラマチックで興味深い。画家はなぜこの作品にはサインを残したのだろう…。地中海の真ん中に浮かぶこんなに小さな島の上にも、好奇心をそそられる場所が満載だ。空港までのガタガタ道に揺られるバスの上で、勉強し直して、また戻ってきたいと思った。



【城塞都市ヴィットリオーザとその港】

(元会館スタッフ)

… 会館 だ よ り …

『天使と悪魔』は眠らない

～宗教と科学の対立が現世にもたらした功罪とは何か～

ダン・ブラウン原作 映画『天使と悪魔』上映記念講演。

講師：齊藤泰弘(当館名譽理事長)

●大阪開催分

日時：5/30(土) 18:00～19:30

参加費：

受講生・一般 1,500 円

個人維持会員 500 円

会場：日本イタリア京都会館 大阪校

定員：20名(最少催行10名)

●京都開催分

日時：6/6(土) 18:00～19:30

参加費：

受講生・一般 1,500 円

個人維持会員 500 円

会場：日本イタリア京都会館 本校

定員：40名(最少催行10名)



カンツォーネ講習会

親しみやすいメロディーの曲を多く集めましたので、お気軽にご参加下さい。

講師：山本隆子氏 (ソプラノ歌手)

日時：6/5(金)、6/19(金)

いずれも 14 時～16 時

参加費(2回一括)：

受講生・一般 5,000 円

個人維持会員 4,000 円

参加費(1回)：

受講生・一般 3,000 円

個人維持会員 2,500 円

会場：日本イタリア京都会館 本校

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italia.on.arena.ne.jp

URL: <http://www.italia.on.arena.ne.jp>